

## 日本語を母語としない幼児に対する保育現場における支援 — 言葉に着目して —

岡野雅子

東京福祉大学 短期大学部 (伊勢崎キャンパス)  
〒372-0831 伊勢崎市山王町 2020-1  
(2017年1月6日受付、2017年3月9日受理)

**抄録:** 近年のグローバル化に伴い保育現場では外国にルーツをもつ子どもが増えている。本研究は、日本語を母語としない幼児が保育園に入園した際に、保育士は当該児の言葉の習得に対してどのような支援を行っているかについて、実証的に明らかにすることを目的とする。当該児の保育を担当している・したことがある保育士349名の質問紙調査の結果から、以下のことが明らかとなった。当該児の母語はスペイン語・ポルトガル語・ベトナム語が多かった。当該児の約半数は日本語の会話ができない状態で入園してくるが、入園後3ヶ月頃までに8割以上の子どもは園生活に慣れていった。このような当該児に対して保育士は、「ゆっくり・はっきりと話す」、「保育士がそばにいるようにする」、「正面から目を見て話す」、「面倒見のよい子と同じグループにする」などの工夫を行っていた。自由記述欄には子どもに対する保育のみならず保護者に対する工夫や努力についての記述が目立った。

(別刷請求先: 岡野雅子)

**キーワード:** 日本語を母語としない幼児、保育所における支援、保育士の工夫、言葉

### 緒言

近年のグローバル化は目覚ましい。例えば、2015年の1年間に日本を訪れた観光客は1973万7千人であり(日本政府観光局, 2016)、2020年には東京オリンピックの開催が予定されており、この流れは一層加速していくものと予想される。グローバル化は観光客の増加のみならず、労働環境においても現れている。企業が外国に工場を移転するようになってから久しいが、日本国内にある製造業では外国から労働力を受け入れている場合が多い。群馬県大泉町は外国人の多いことで全国的にも知られているが、2016(平成28)年10月31日現在で大泉町の人口総数41,525人で、そのうち外国人は7,100人(17.1%)を占めている(大泉町HP, 2016)。外国人居住者は製造業に従事するために家族とともに来日するケースが多いと推測され、壮年層であるとする幼い子どもを同行していると思われる。子ども期は人間発達の基礎となる時期であることから、保育・教育を受けることは子どもの当然の権利である。したがって、日本で暮らす外国にルーツをもつ子どもは、日本の保育・幼児教育を受けることになる。このような社会的背景をもとに多文化・異文化の問題は、保育学研究において今日の課題の1つである(塚崎・無藤, 2005)。

本研究では、日本語を母語としない就学前の幼児が保育現場(幼稚園・保育所等)に入園した際に、保育者は当該児の言葉の習得に対してどのような支援を行っているかについて、実証的に明らかにすることを目的とする。

なお、大辞林第三版(松村, 2006)から、本稿で母語とは、「ある人が幼児期に周囲の大人たち(特に母親)が話すのを聞いて最初に自然に身につけた言語」とする。ちなみに、母国語とはその国の公用語であるが、自分が属する民族が必ずしも国家を形成しているとは限らず、母語と母国語が一致していない場合は世界的に見るとしばしばあると言われている。日本においては、母語も母国語も日本語であるという場合が一般的である。

本研究で資料収集を行った地域は、東京から約80Kmに位置する北関東A市である。A市の人口は、2016(平成28)年12月1日現在21万2053人で、そのうち外国人は11,136人で約5.3%を占めている(伊勢崎市HP, 2016)。

### 研究方法および調査対象

#### 1. 研究方法

研究方法は、質問紙調査法である。

質問項目は以下の通りである。すなわち、問1. クラスに

日本語を母語としない幼児はいるか、問2.日本語を母語としない幼児について(母語は何語か、入園時の日本語力の程度)、問3.当該児の保育について(園生活に慣れるまでの期間、日本語を身につけるための保育士の工夫、園生活の中で困難を感じる面)、問4.日本語を母語としない幼児の保護者について(家族の中で日本語を母語としない人は誰か、保護者の日本語力の程度)、問5.保護者との関係について(保護者とコミュニケーションをとるための保育士の工夫、保護者との関係の中で困難を感じる面)、問6.日本語を母語としない幼児の保育について日頃思っていること、および、属性(年齢、保育経験年数)からなる。

## 2. 調査対象者

わが国の就学前の保育施設は現在、主に幼稚園、保育所、認定こども園がある。その中で日本語を母語としない幼児がより多く通園していると思われる施設は、保育所(園)であると推測される。そこで、本研究ではA市内にある保育所(園)に勤務する保育士を調査対象者とした。なお、保育所と保育園の名称の違いであるが、保育所とは児童福祉法により定められた児童福祉施設の一つであり公的に用いられる名称であるが、保育園の名称も一般的に用いられている。本稿では以下は保育園とする。

本研究の調査対象者の年齢および保育士歴は、表1の通りである。

## 3. 調査手続き

A市の公立・私立保育園の計42園(全園)を対象に質問紙票を配布し、回答記入後に郵送にて回収した。公立保育園にはA市役所こども保育課を通して依頼し、回答記入後に回収した。私立保育園にはA市私立保育園月例幹事会の開催時に、会議に先立って筆者が本研究の趣旨を説明し協

力依頼を行い、調査票を配布した。その後各園にて回答記入後に郵送にて回収した。

調査協力の依頼の際には、文書および口頭にて、調査結果は本研究以外には使用しないこと、園名や回答者などが特定されることは一切無いこと、回答は任意のものであり協力いただける場合でも答えたくない質問には答えなくてもよいこと、研究終了後には適切に廃棄することを説明した。回答記入後提出した回答者はそれをもって同意したものとみなした。

## 4. 資料収集時期

本研究の調査資料の収集時期は、2016(平成28)年11月である。

## 5. 統計処理

統計処理にはIBM SPSS Statistic Ver.20(2011)を用い、単純集計および項目間の関連では $\chi^2$ 検定を行った。

## 結果

### 1. 回答者について

保育士による回答記入後の調査票は、37園(全園の88%)から計464人分を回収した。1園あたりの回収数は1から28でありバラツキが大きい。問1.に対して「いない」を選択した保育士は調査票の提出は不要と考えて提出しなかった可能性が高いと思われる。本研究では問1.に「いる」「今はいないが以前に経験した」の回答者349名を分析対象とした。

### 2. 日本語を母語としない幼児について

#### ①当該児の母語

日本語を母語としない幼児の母語は図1の通りであった。なお、一人の保育士が複数人の日本語を母語としない幼児を保育している事例があり、その場合には回答は複数となるため、複数回答である。以下の図においても同様である。

表1. 回答者(保育士)の年齢および保育士歴

項目	人	%	
年齢	29歳以下	135	38.9
	30~39歳	118	34
	40歳以上	94	27.1
	不明	2	-
計	349	100	
保育士歴	5年以下	84	24.3
	6~10年	106	30.7
	11~20年	119	34.5
	21年以上	36	10.4
	不明	4	-
	計	349	99.9

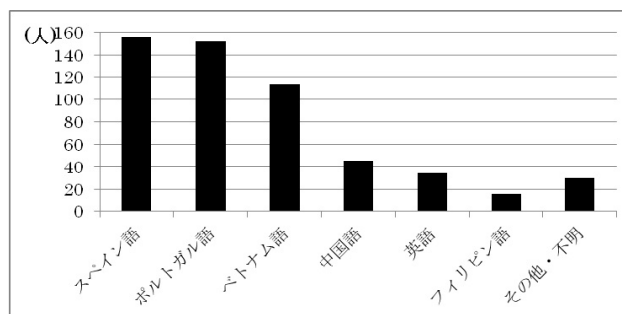


図1. 当該児の母語 (複数回答)

スペイン語(44.7%)とポルトガル語(43.6%)が多かった。ブラジルではポルトガル語が公用語として用いられていて、スペイン語はペルーをはじめとして中南米諸国の公用語である。したがって、ブラジルやペルーなどの南米出身の保護者の子どもたちが多くと解釈できる。3番目に多い母語は、ベトナム語である。スペイン語、ポルトガル語、ベトナム語の3言語が当該児の母語として多いことがわかった。

#### ②当該児の入園時の日本語力

当該児の保育園入園時の日本語能力については図2の通りであった。何らかの言語を習得している発達段階にある当該児のうち、半数近い子ども(47.6%)が日本語の会話ができない状態で入園していることが明らかとなった。

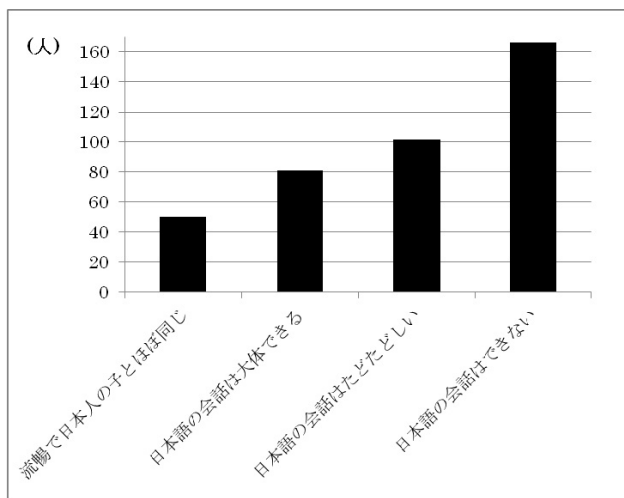


図2. 当該児の入園時の日本語力(複数回答)

### 3. 日本語を母語としない幼児の保育について

#### ①園生活に慣れるまでの期間

当該児が園生活に慣れるまでの期間は図3の通りであった。すぐに(2週間以内に)慣れた幼児(26.1%)を含めて3か月くらいまでに慣れた幼児は88.8%を占めている。幼児の適応力の高さに改めて驚かされる。しかし、保育園生活に慣れるまでに半年以上かかった幼児も30.3%いて、さらに1年以上経っても慣れない幼児も5.2%いた。

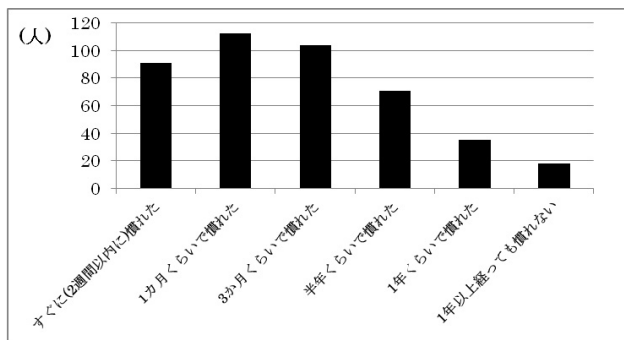


図3. 当該児が園生活に慣れるまでの期間(複数回答)

#### ②当該児が日本語を身に付けるための保育士の工夫

保育園において当該児が日本語を身に付けるべく、保育士は様々な努力や工夫を行っていた。図4のように、当該児に対して意識的に「ゆっくり・はっきりと話す」が最も多かった(77.7%)。ゆっくり、はっきりと話しかけることにより、当該児の日本語を聞き取る力を育てようとしていることがわかる。また、話しかける時には当該児の「正面から目を見て話す」(40.7%)、「簡単に話す」(2.6%)、「繰り返して話す」(1.4%)も同様に日本語を聞き取る力を育てようとしていると言えるだろう。「保育士がそばにいるようにする」(43%)という努力を行っている保育士は多いが、保育士がそばにすることができない場合もあることから「面倒見のよい子どもと同じグループにする」(30.4%)という工夫も行われていた。また、「絵・写真・イラストを一緒に示す」(24.4%)ことにより言葉である音声言語とともに視覚的刺激を提示して、当該児の日本語の理解を促すことが図られていた。「ジェスチャーをする」(3.7%)、「実物を示す」(0.9%)も同様であるといえる。

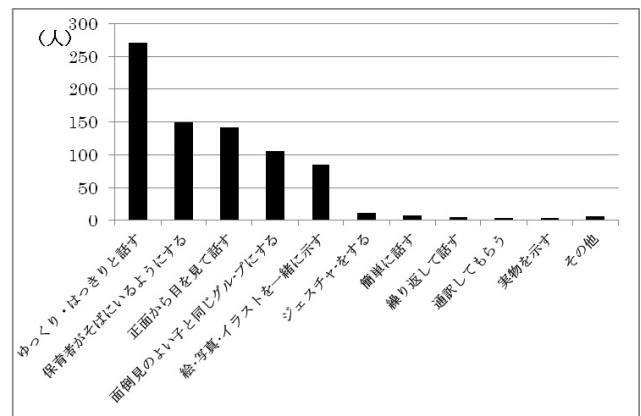


図4. 当該児が日本語を身に付けるための保育士の工夫(複数回答)

#### ②当該児の園生活上の困難

保育士から見て、当該児が保育園生活を送るうえで何が困難であるかについての回答は、図5の通りであった。「保育士やクラスの子どもたちから当該児に発信したことが当該児には理解できない」(53.3%)、「当該児から発信したことが保育士やクラスの子どもたちに理解できない」(50.1%)の回答が多いが、これは日本語を母語としない当該児であることから当然のこととして受け止めることができよう。3番目に困難なことは「食事(給食)場面で習慣が違う」(47%)であった。保育所保育は保護者の就労などで保育を必要とする子どもが対象であることから、保育時間が幼稚園よりも長く生活の側面が強い。そのため、食事場

面は保育園生活のなかで重要な場面であり、保育する側としては困難な場面として受け止めている保育士が多いことがわかる。

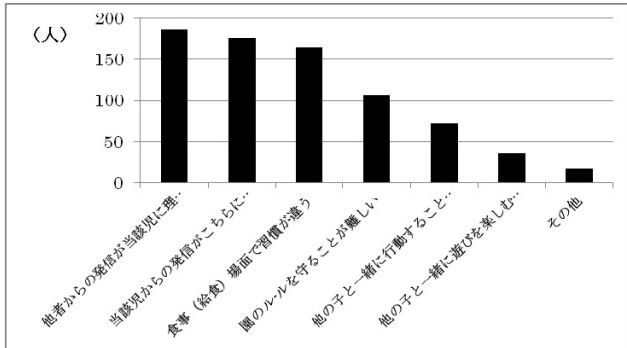


図5. 当該児の園生活上の困難(複数回答)

#### 4. 日本語を母語としない幼児の保護者について

##### ①日本語を母語としない家族は誰か

幼児期の保育は、環境を通して行われるものである(『幼稚園教育要領』第1章総則)ことから、幼児にとっての環境を整えるうえで保育園と家庭との連携は欠かすことができない。そこで日本語を母語としない幼児の保護者について尋ねた。

当該児の家族の中で日本語を母語としない人は、図6に示すように、「両親」(78.8%)が圧倒的に多かった。したがって、当該児の家庭生活においては日本語が話されていると想像することは難しいといえるだろう。

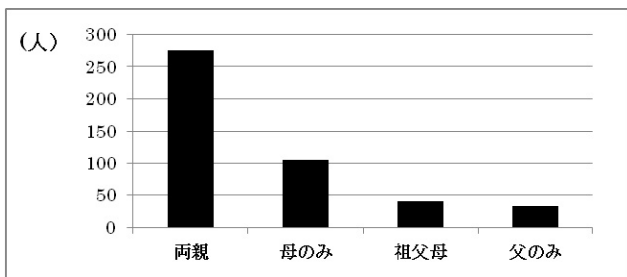


図6. 保護者のうち日本語を母語としない人はだれか

##### ②保護者の日本語力

当該児の保護者の日本語力は、図7の通りであった。「日本語による会話は普通にできて文字も読める」は38.1%で決して多くはなかった。「会話はできるが文字はひらがなのみである」(55.3%)および「会話は大体できるが文字は難しい」(40.1%)が多かった。「会話はたどたどしく、文字は無理」(31.8%)、「会話はできず、文字も無理」(7.7%)も相当程度いることがわかる。

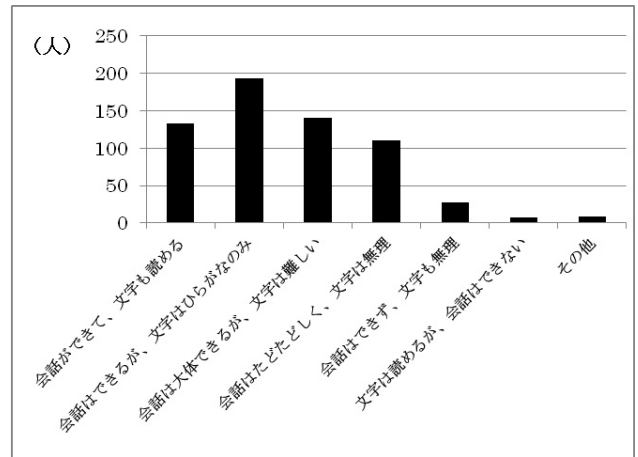


図7. 保護者の日本語力(複数回答)

##### ③保護者との関係形成のための保育士の工夫

前述の通り子どもの保育にとって園と家庭との連携は重要であるので、保育士は保護者との関係形成に腐心することになる。どのような工夫を行っているかについて見ると、図8の通りであった。「園だよりなどの配布物にはひらがなのルビをふる」は57%で最も多く、保育士側の発信を保護者に正確に受信してもらうための工夫といえる。「絵・写真・イラストを用いて示す」(27.5%)も同様の意図があると思われる。「母語が分かる人に通訳してもらう」(37.8%)は、保護者の母語により直接コミュニケーションをとるための工夫といえる。母語が分かる人が近くにいるとは限らないので「当該児に通訳してもらう」(17.2%)の回答があり興味深い。つまり、保護者は日本語力がなかなか向上しないが、その間に当該児は日本語をある程度身に付けて、保育士と保護者の間のコミュニケーションの媒介役を果たしていることがわかる。「保育士が外国語を勉強する」が8.6%の保育士から回答があったことに注目したい。すなわち、相手の保護者側に日本語を理解するように要求するだけでなく、こちらの保育士側も相手に寄り添う努力をしようという姿勢が読み取れる。

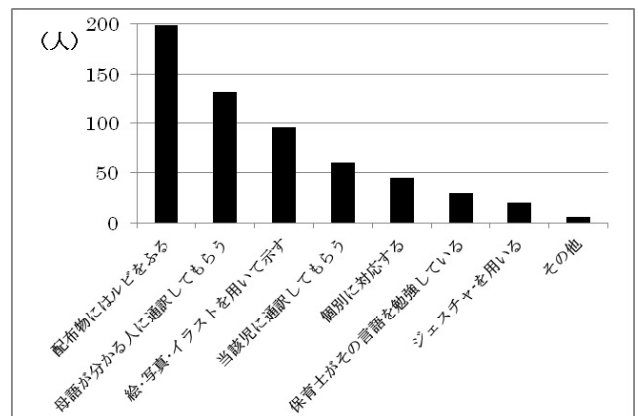


図8. 保護者との関係形成のための保育士の工夫(複数回答)

## ④保護者との関係形成の上での困難

保護者との関係形成の上での困難な点については、図9の通りであった。「保育士から発信したことが保護者には理解できない」(73.9%)が最も多く、「保護者から発信したことが保育士に理解できない」(36.7%)が続いた。この2項目が多いことは日本語を母語としない保護者であることから、当然のこととして受け止めることができよう。先行研究においても、保育者が特に困難に感じている問題は言葉であり、その多くが保育者と子どもあるいは親とのコミュニケーションであるという(久富, 2002)。

その次に困難なこととして「保護者が園のルールを守ることが難しい」(27.2%)、「他の保護者と交流することが難しい」(19.8%)、「宗教や風習により生活上の規律がある」(12%)と続いた。これらは社会生活を送るうえで求められる社会性に関連する事柄である。大人はその社会に適応した行動をとることを子どもよりも一層求められると思われるので、これらの項目は保育士が捉えている困難であるとともに、異文化社会の中で暮らしている保護者自身が強く感じている困難な側面を反映していると考えられる。

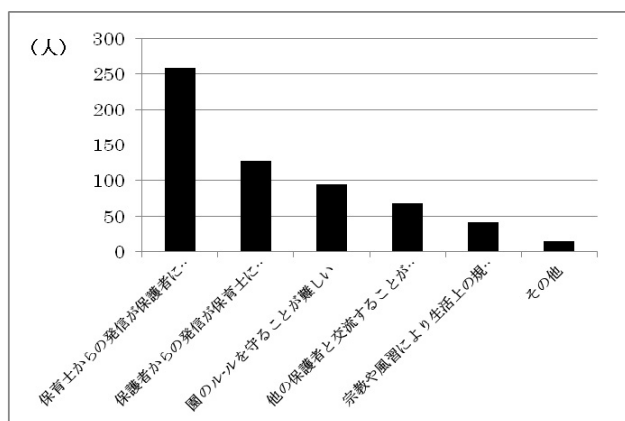


図9. 保護者との関係上の困難(複数回答)

## 5. 項目間の関連

以上にそれぞれの項目について見てきたが、当該児に対する言葉を中心とした支援についてより明確にするために、項目間の関連について以下に検討する。

表2の「当該児に対する保育士の工夫」と関連する項目について見ると、「正面から目を見て話す」は保育士の年齢が高い群で多く、「繰り返し話す」は保育士の年齢が高く保育士歴の長い群で多いことがわかる(カイ2乗検定、以下同じ。「正面から目を見て話す」×保育者の年齢(3群),  $\chi^2=7.56$ ,  $df=2$ ,  $p<0.05$ , 「繰り返し話す」×保育者の年齢(3群),  $\chi^2=8.15$ ,  $df=2$ ,  $p<0.05$ , 「繰り返し話す」×保育士

歴(4群),  $\chi^2=10.84$ ,  $df=3$ ,  $p<0.05$ )。当該児の入園時の日本語力として会話ができない群では「正面から目を見て話す」( $\chi^2=6.09$ ,  $df=1$ ,  $p<0.05$ )、「ゆっくり・はっきりと話す」( $\chi^2=7.53$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ )、「集団活動の時は保育者がそばにいる」( $\chi^2=10.72$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ )という努力を行っていた。また「集団活動の時は保育者がそばにいる」( $\chi^2=12.82$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ )は園生活に慣れるまでに長い期間を要する場合に行う工夫であることがわかる。

当該児の園生活の中で困難を感じる側面については、保育士の年齢には差が認められず、「食事場面(給食)で習慣が違うこと」( $\chi^2=9.01$ ,  $df=3$ ,  $p<0.05$ )は保育士歴の長い保育士が困難と捉えていた。園に慣れるまでに長い期間を要する場合および入園時に会話ができない場合に「当該児からの発信が理解できない」( $\chi^2=23.67$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ ,  $\chi^2=20.04$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ )、「他者からの発信が当該児に理解できない」( $\chi^2=19.13$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ ,  $\chi^2=17.18$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ )が多いことは首肯できることであるが、「他児と一緒に行動することが難しい」( $\chi^2=14.94$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ ,  $\chi^2=7.77$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ )、「他児と一緒に遊びを楽しむことが難しい」( $\chi^2=7.28$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ ,  $\chi^2=8.11$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ )、「園のルールを守ることが難しい」( $\chi^2=15.57$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ ,  $\chi^2=27.46$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ )についても当てはまるものが明らかとなった。

一方、「保護者に対する保育士の工夫」は、「配布物にルビをふる」「絵・写真・イラストを用いて示す」「ジェスチャーを使う」には、保育士の年齢、保育士歴、当該児の園生活に慣れるまでの期間、当該児の入園時の日本語力のいずれとも関連は見いだせなかった。「当該児に通訳してもらう」( $\chi^2=15.42$ ,  $df=3$ ,  $p<0.01$ )は保育士歴の長い群で多く、「保護者の母語が分かる人に通訳してもらう」( $\chi^2=12.23$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ )は園生活に慣れるまでに長い期間を要する群で多かった。「保育士が外国語を勉強する」( $\chi^2=11.35$ ,  $df=3$ ,  $p<0.01$ ,  $\chi^2=7.81$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ )は、保育士歴が長い群、園生活に慣れるまでに長い期間を要する群に多かった。

保護者との関係の中で困難を感じる側面については、保育士の年齢とは関連が見いだせず、「園のルールを守ることが難しい」( $\chi^2=8.58$ ,  $df=3$ ,  $p<0.05$ )、「宗教や風習により生活上の規律がある」( $\chi^2=10.06$ ,  $df=3$ ,  $p<0.05$ )は保育士歴の長い群に多かった。「保護者からの発信が理解できない」( $\chi^2=3.88$ ,  $df=1$ ,  $p<0.05$ )、「他の保護者と交流することが難しい」( $\chi^2=5.68$ ,  $df=1$ ,  $p<0.05$ )は園生活に慣れるまでに長い期間を要する群に多く、「保育士からの発信が保護者に理解できない」( $\chi^2=12.79$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ )は入園時に会話ができない群に多かった。

表2. 「当該児に対する保育士の工夫」等と他の項目との関連

	項目	保育士の年齢 (3群)	保育士歴 (4群)	園生活に慣れるまでの期間 (長い・短い2群)	入園時の日本語力 (会話ができない・できる2群)
当該児に対する 保育士の工夫	絵・写真・イラストを一緒に示す	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
	正面から目を見て話す	* 高年齢>若年齢	n.s.	n.s.	* できない>できる
	ゆっくり・はっきりと話す	n.s.	n.s.	n.s.	** できない>できる
	集団活動の時は保育士がそばにいる	n.s.	n.s.	** 長>短	** できない>できる
	面倒見のよい子と同じグループにする	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
	ジェスチャーを使う	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
	簡単に話す	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
	繰り返し話す	* 高年齢>若年齢	* 長>短	n.s.	n.s.
	通訳してもらう	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
	実物を示す	n.s.	* 長>短	n.s.	n.s.
	話しかける回数を多くする	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
保育士が当該児 の園生活の中で 困難を感じる側面	当該児からの発信が理解できない	n.s.	n.s.	** 長>短	** できない>できる
	他者からの発信が当該児に理解できない	n.s.	n.s.	** 長>短	** できない>できる
	他児と一緒に行動することが難しい	n.s.	n.s.	** 長>短	** できない>できる
	他児と一緒に遊びを楽しむことが難しい	n.s.	n.s.	** 長>短	** できない>できる
	園のルールを守ることが難しい	n.s.	n.s.	** 長>短	** できない>できる
	食事場面(給食)で習慣が違う	n.s.	* 長>短	n.s.	n.s.
保護者に対する 保育士の工夫	配布物にはルビをふる	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
	絵・写真・イラストを用いて示す	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
	母語が分かる人に通訳してもらう	n.s.	n.s.	** 長>短	n.s.
	当該児に通訳してもらう	n.s.	** 長>短	n.s.	n.s.
	自分(保育士)が外国語を勉強する	n.s.	** 長>短	** 長>短	n.s.
	個別に対応する	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
	ジェスチャーを使う	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
保育士が保護者 との関係の中で困 難を感じる側面	保護者からの発信が理解できない	n.s.	n.s.	* 長>短	n.s.
	保育士からの発信が保護者に理解できない	n.s.	n.s.	n.s.	** できない>できる
	他の保護者と交流することが難しい	n.s.	n.s.	* 長>短	n.s.
	園のル-ルを守ることが難しい	n.s.	* 長>短	n.s.	n.s.
	宗教や風習により生活上の規律がある	n.s.	* 長>短	n.s.	n.s.

\* p<0.05, \*\* p<0.01

### 6. 保育士の自由記述より

『日本語を母語としない幼児の保育について、日頃思っていること・考えていること』の自由記述欄には、225名(64.5%)から回答を得た。記述内容は次のように分類された。「当該児の保育について」157名(回答者の70%)、「当該児の保護者について」91名(同40.4%)、「その他(支援体制・制度等)」16名(同7.1%)であった(複数回答)。

『当該児の保育について』は、以下のような記述があった。「仲間外れや寂しい思いをしないように常に見守っている。必要に応じて抱っこをしたりしてスキンシップを多く取り入れている。」「言葉が通じないと子ども同士のコミュニケーションがとれないので、保育士が仲立ちとならなければならないと思っているが、その子どもにより対

応の仕方が違ってくるので難しい。」「子どもたち同士言葉が通じなくても楽しめる活動を多く取り入れるようにすると、自然とお互いに関われるようになって日本語を学ぶことができる。」「自分の思いを言葉に表して言いにくいこともあると思うので、その子の表情をよく見るようにしている。」「食生活の違いが大きく好みの味も違うと思うので、その子に対して他の子と同じように完食するよう勧めることは良いのだろうかと考えてしまう。」「言葉や生活習慣などわからないことばかりで他の子に比べて何倍も不安であろうから、できるだけ寄り添いアイ・コンタクトをとっている。」「子ども同士のトラブルが生じた時にお互いに言いたいことの意味がよく分からないところがあり、あやふやになってしまう時があり気がかりである。」

『当該児の保護者について』は、以下のような記述があった。「様々な難しさはあるもの子どもは保育所に慣れ生活できるようになってくるが、保護者とのコミュニケーションはなかなか思うようにはかかず難しさを感じる。保護者とのコミュニケーションが取れることにより、当該児の保育もより充実してくると思うのだが。」「国が違ふと考え方も異なるため、子どもの育て方や教育について保護者の意見もあり、こちらが気を遣うことが多い。」「お知らせすることを一つ一つ丁寧に伝えても、うまく伝えることが難しいことがある。」「お互いに伝えたいと思うことがなかなか伝わりにくく、思っていることと違う受け止め方をされてしまうことがある。」「日々の連絡について身振り手振りを交えて伝えているが、どれだけ伝わっているのか不安に思うことがよくある。」「コミュニケーションで難しいと感じる場面は多いが、子どもも保護者もそれぞれに思いがあると思うのでその思いも大切にしようと思がけている。」「子どもたちよりも保護者との関係の方が難しい。大人たちはいろいろな考えをもっているし、今まで経験してきたことからそれぞれの立場を思っ接しないといけない。」

『その他(支援体制・制度等)』には、以下のような記述があった。「今後も増えていくと思うので、行政側が通訳をしてくれる人などの支援を充実してもらいたい。」「日常会話や単語などを分かり易く表にして、市が配布してほしい。」「それぞれの国の言葉を学ぶ機会があればいい。」「外国語の研修が保育士側にも必要になってきたように思う。」「他の園児の保育に支障が出てしまうため、専属保育士が欲しい。」

## 考察

近年急速にグローバル化が進む社会にあって、日本語を母語としない幼児が保育現場に入ってきている。そのため、現場の保育者の一人一人は試行錯誤を繰り返しながら様々な努力を行い、工夫をしている。それを集約することは保育にとって重要な課題であり、その結果は貴重な智慧になると考える。

保育現場の保育士による回答からは、「ゆっくり・はつきりと話す」など日々の保育の営みの中で、当該児が日本語を聞き取る力を育てようと多くの保育士が工夫していることが明らかとなった。それは、保育士が当該児の立場に立った支援であるということが出来るだろう。また、自由記述には「子どもたち同士言葉が通じなくても楽しめる活動を多く取り入れるようにすると、自然とお互いに関われるようになって日本語を学ぶことができる」という意見が

あり、保育士が直接的に当該児に働きかけるだけでなく同年齢の子どもたちがいるという集団保育の“場”自体が当該児に対して有効に働くように、保育士が環境設定を行っていることがわかる。まさに「保育とは環境を通して行うもの」というわが国の幼児教育・保育の基本的な了解事項が実践されていると言える。

また、『保育所保育指針』(厚生労働省, 2008)では、領域「人間関係」の内容の14項目の中に「外国人など、自分とは異なる文化を持った人に親しみを持つ。」があるが、外国にルーツをもつ子どもが保育現場に参加することは、他の子どもにとっての環境の観点から、この人間関係領域の内容に応えるものと言えるのではなかろうか。

しかし、保育現場の保育者にとって日々の保育実践はなかなか難しいことは容易に想像できる。例えば、佐藤(2014)は、「外国につながる子どもの言動を否定することだけを繰り返していると、他の子どもたちが外国につながる子どもを自分たちよりも下に見たりすることにつながる危険性がある。そのため、保育者は、自分自身が日本語がわからない子どもに対する接し方のモデルにもなることを意識し、援助方法を考える必要がある。」と述べている。上野ら(2008)も、国際化、多文化化する今日の保育現場においては、まず保育者自身が多様性を認め、子どもとともに差異に向き合うことが不可欠であると指摘している。

また、本研究で明らかになった保育士の工夫や努力は当該児の立場に立った支援であると前述したが、このことは、保護者との関係形成のための保育者の工夫の中に「保育士がその言語を勉強する」と回答した保育士が1割弱いたことや、「日本語を母語としない子どもも保護者もそれぞれに思いがあると思うので、その思いも大切にしようと思がけている」という記述からもうかがえる。保育とは、本来、育てる者(保育者)が育てる者(子ども)に寄り添うことが基本的な姿勢として求められるが、本結果を見ると、その姿勢は日本語を母語としない幼児に対する保育の際の姿勢であるのみならず、保護者に対する姿勢としても活かされているように思われる。

保育園と家庭との連携・連絡は子どもの健やかな発達にとって必要不可欠であり、その重要性を認識しているからこそ保育士は保護者に対する工夫や努力を懸命に行っていることが分かる。「子どもたちよりも保護者との関係の方が難しいと思う」という記述からは、保護者の立場を尊重する姿勢とともに、子どもの保育に関しては専門家であることの自負もうかがえる。

支援体制や制度についての記述の中には、保育現場に通訳の配置を望む記述もあった。品川(2011)は、日常の保育において通訳の存在は大変重要であり、通訳がいることで

子どもや保護者へのコミュニケーションがスムーズにいき、細かいところにまで配慮した保育が実現できると述べている。また、劉ら(2013)は、就学直前の4か月間のプレスクール・プログラムによる学習支援は、対象児童の日本語能力の向上、保護者の不安解消などに大きな役割を果たしていることを事例を通して報告している。

今回の結果から、「当該児の園生活上の困難」として「食事(給食)場面で習慣が違うこと」を約半数の保育士が回答していることは注目される。保育所保育は就学前の幼児にとって生活の場であり、食事をすることは生活の中の重要な行為である。そして食事場面にはその国や地域の文化が反映されているという側面がある。箸やスプーンを使うこと、箸の持ち方・使い方、食事の前後の挨拶、食事中の談話の有無などはその例と言える。「食生活の違いが大きく好みの味も違うと思うので、その子に対して他の子と同じように完食するよう勧めることは良いのだろうかと考えてしまう」という記述は、子どもの保育とは生活のなかで営まれるものであるがゆえの悩みであることを物語っている。森本ら(2002)は多文化を背景にもつ保護者への質問紙調査から、園への気がかりな事項として「いじめ」「病気」「食事の問題」が挙げられたことを報告しているが、今回「食事の問題」が挙げられたことと一致している。

しかし、本研究は北関東の一地域における資料に基づいたものであり、母語はスペイン語、ポルトガル語、ベトナム語が多かったが、外国にルーツをもつ幼児の場合にその背景は様々であると推測される。したがって、本研究結果は日本語を母語としない幼児に対する支援の一つの例にすぎない。ここに本研究の限界があると考えられる。また、本研究は保育士を対象とした質問紙調査を資料としているため、保育者による個々の当該児に対する支援とそれを受けた当該児の変化の有り様などの相互性については明らかにすることができなかった。子どもは人や物などの環境との相互作用の中で育つことから、発達により詳細な分析が必要であり、今後の課題として残されている。

また、保育とは、元来多様な視点からのアプローチが可能であり、その多様性に特徴がある(秋田, 2016)。近年では、経済学者の目から見たとき幼児期の教育に対する投資は極めて投資効率が良いことが指摘されている(中室, 2015)。

そもそも多文化教育はアメリカから始まり、マイノリティの文化を大事にしていこうとする教育のあり方であり教育改革であった(久富, 2002)。そして、わが国の保育研究において多文化教育に関する研究が認知されるようになったのは、1980年代半ば以降であり(大戸, 1999)、その歴史は浅い。その故もあってか、保育者の養成課程で異文化・多文化と子どもの育ちと生活について学ぶ機会は現状

ではほとんどないと名倉(2011)は指摘している。

今後は多文化共生に向けて国際的共同責任への教育が重要になると箕浦(2011)は述べている。つまり、世界市民的であることの教育をどのように取り入れていくかという課題である。保育現場における支援を考えると、目の前にいる幼児に対して適切な保育を行うことは当然のことであるが、それだけでなく、その幼児はいずれ大人になることを見通して「世界市民」を育てるといった広い視野が求められているといえよう。

## 結論

近年、保育現場に外国にルーツをもち日本語を母語としない幼児が入園する例は珍しくない状況になっている。そのような幼児に対して保育者は、「ゆっくり・はっきりと話す」、「保育者がそばにいるようにする」、「正面から目を見て話す」、「面倒見のよい子どもと同じグループにする」などの工夫を行っていることが明らかとなった。そして、入園時の日本語力として会話ができない当該児に対しては「正面から目を見て話す」、「ゆっくり・はっきりと話す」、「集団活動の時は保育者がそばにいる」をより多く行っており、「集団活動の時は保育者がそばにいる」は園生活に慣れるまでに長い期間を要する当該児の場合により多く行う工夫であることがわかった。このように、保育者は当該児の寂しさや心細さなどを推し量ってその子の立場に立った支援を行うべく努力をしていた。しかし、保育とは子どもを生活の中で育てる営みであるゆえに、食生活などの生活面の背景の違いに直面して悩む保育者の姿も明らかとなった。

## 謝辞

研究にご協力を頂きました保育園園長先生をはじめ保育士の皆様に深く感謝申し上げます。

## 文献

- 秋田喜代美(監修)(2016): あらゆる学問は保育につながる: 発達保育実践政策学の挑戦. 東京大学出版会. 東京.
- 上野葉子・石川由香里・井石令子ら(2008): 長崎市における多文化保育の現状と展望. 保育学研究 **46**, 277-288.
- 大戸美也子(1999): 幼児の多文化教育(総論). 保育学研究 **37**, 8-12.
- 群馬県伊勢崎市ホームページ(2016): <http://www.city.isesaki.lg.jp> (2016年12月14日検索)
- 群馬県大泉町ホームページ(2016): <http://www.town.oizumi.gunma.jp> (2016年12月14日検索)



- 厚生労働省(2008): 保育所保育指針.
- 佐藤千瀬(2014): 第3章 1節 外国につながる子どもの保育・教育と保護者への支援: 言葉に関する事例. In: 咲間まり子(編), 多文化保育・教育論, みらい, 岐阜, pp30-39.
- 品川ひろみ(2011): 多文化保育における通訳の意義と課題: 日系ブラジル人児童を中心として. 保育学研究 **49**, 224-235.
- 塚崎京子・無藤 隆(2005): 保育・幼児教育の研究の動向—二つの学会誌10年間の動向の分析—. 白梅学園短期大学 教育・福祉研究センター研究年報 **10**, 24-47.
- 中室牧子(2015): 「学力」の経済学. ディスカヴァー・トゥエンティワン, 東京.
- 名倉啓太郎(2011): 3回の国際交流委員会企画シンポジウムを踏まえて. 保育学研究 **42**, 148-150.
- 日本政府観光局(JNTO)(2016):  
[http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data\\_info\\_listing/pdf/160119\\_monthly.pdf](http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/pdf/160119_monthly.pdf) (2016年12月14日検索)
- 久富陽子(2002): 日本の多文化保育への課題に関する一考察: 母語に対する考え方. 日本保育学会 第55回大会発表論文集, pp408-409.
- 松村 明(編)(2006): 大辞林第三版. 三省堂, 東京, p2339.
- 箕浦康子(2011): 多文化社会のなかでの育ちとは? 保育学研究 **42**, 152-154.
- 文部科学省(2008): 幼稚園教育要領.
- 森本恵美子・谷口正子・山岡テイラ(2002): 多文化を背景にもつ保護者から見た園生活—多言語による質問紙調査結果より—. 日本保育学会 第55回大会発表論文集, pp410-411.
- 劉 郷英・川上貴美恵・中田照子(2013): 日本における多文化・多言語環境に育つ外国人幼児の言語発達の実態と学習支援の現状と課題に関する検討—B県A市におけるプレスクール事業の取り組みを中心に—. 福山市立大学教育学部研究紀要 **1**, 123-133.

## Support at Nursery School for Children Whose Native Language Is Not Japanese: Focused on Their Language

Masako OKANO

Junior College, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),  
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

**Abstract :** With recent globalization, the number of children originally from oversea countries is increasing in nursery schools. The present study aims to clarify in a demonstrative manner how teachers support preschool children whose native language is not Japanese to learn Japanese when they enter nursery schools. A questionnaire survey was conducted for 349 teachers who taught or had taught children whose native language was not Japanese and the following result was obtained. The native languages of most of the children were Spanish, Portuguese, and Vietnamese. Almost half of the children entered the nursery schools without the ability to speak Japanese, but more than 80% of the children became accustomed to school life in about three months. For these children, the teachers tried to “speak slowly and clearly,” “stay with the children,” “talk to the children face to face, looking into their eyes,” and “put a very helpful child in a group of these children.” The teachers tried not only to support the children but also establish good relationships with the parents. In the free description field, the teachers wrote about their actions or efforts for nursery children as well as parents.

(Reprint request should be sent to Masako Okano)

**Key words :** Children whose native language is not Japanese, Support at nursery school, Contrivance of teacher, Language